【考察】以上よりマカクザルには心の理論がある可能性，及び内側前頭前野が心の理論の脳回路の一部である可能性が示唆された．

6　統合失調症患者におけるSETD1A遺伝子の稀な変異のスクリーニング

保谷　智史[1)]・井桁　裕文[1)]・渡部雄一郎[1)2)]
布川　綾子[1)3)]・江川　　純[1)]・井上絵美子[1)]
杉本　篤言[1)4)]・林　　剛丞[1)]・折目　直樹[1)]
澁谷　雅子[1)5)]・染矢　俊幸[1)]

新潟大学大学院医歯学総合研究科
精神医学分野[1)]
新潟大学医歯学総合病院
魚沼地域医療教育センター精神科[2)]
大島病院[3)]
新潟大学大学院医歯学総合研究科
地域精神医療学寄附講座[4)]
新潟大学医学部医学科
総合医学教育センター[5)]

【はじめに】白人を対象とした全エクソーム解析により，統合失調症のリスク遺伝子としてSETD1A遺伝子が同定された．しかしながらその後の追試は日本人における一報のみで，関連は再現されていない．SETD1A遺伝子が人種を超えた統合失調症リスク遺伝子であることを明らかにする目的で，SETD1A遺伝子のリシークエンスおよび関連解析を行った．

【倫理的配慮】本研究は新潟大学医学部遺伝子倫理審査委員会により承認されており，対象者からは書面にて研究参加の同意を得た．

【リシークエンス】統合失調症患者186人について，SETD1A遺伝子のコード領域をサンガー法でリシークエンスした．同定された計4個の新規ミスセンス変異のなかで，複数の機能予測ソフト（SIFT，PolyPhen-2およびCADD）で有害性が示唆された非同義変異（Arg218Cys変異，Pro729Leu変異およびArg1542Trp変異）を候補リスク変異とみなした．Arg218Cys変異，Arg1542Trp変異をもつ患者については，両親サンプルの利用が可能であり，いずれの変異も非罹患者の母から伝達されていた．

【関連解析】統合失調症患者620人および対照者672人において，SETD1A遺伝子の候補リスク変異をTaqMan法によりタイピングした．公的データベース（iJGVD，HGVD，1KGP）に登録されている4,866人も対照サンプルに加えた．候補リスク変異は対照よりも症例で有意に多く同定され，そのオッズ比は20を超えた．

【結論】SETD1A遺伝子のArg218Cys変異，Pro729Leu変異，およびArg1542Trp変異が，統合失調症の発症に大きな効果をもつ稀なリスク変異である可能性が示唆された．

7　原始反射の残存に注目した子どもの行動評価と支援の試み

稲月まどか

特定医療法人青山信愛会新潟信愛病院

【はじめに】原始反射は生来性にプログラムされている胎児期から幼児期前半までにみられる行動パターンで，未熟な胎児や乳児が生き残るための行動パターン（反射）として脳幹や脊髄から発射される．幼児期以降上位脳が発達することにより，原始反射は抑制され，またより高度な行動パターンに統合されていくとされている．近年幼児の運動発達支援や幼児健診を行う中で，本来消失しているはずの原始反射が年長児になっても残存している幼児を多く見るようになり，こうした児童の多くが日常生活場面で適応困難を抱えていることに気付くようになった．今回原始反射の残存により生じうる行動特性をリスト化し（原始反射チェックリスト試作版），保育園担任に子どもの行動評価尺度とともに記入してもらった．

原始反射の残存をチェックする試みとしての原始反射チェックリストの得点について他の指標とともに検討する．

【方法】新潟県下越地区4市町村の保育園年長児全員を対象に，ADHDRS Ⅳ，子どもの心の強さと困難さアンケート（SDQ），足指の運動能力テスト得点を担任に記入してもらった．さらに普段の行動特性から担任が「気になる子」に対し原

始反射チェックリスト試作版で評価し，対象として各クラス数名の「気にならない子」も同様のリストで評価した．行動評価尺度の得点と，原始反射チェックリストの得点率（評価対象となった項目の得点割合）を統計処理によってその相関や平均点の優位差などを検討した．

【結果】「気になる子」の行動評価尺度得点，原始反射チェックリスト得点率はいずれも高く，気にならない子の平均値と比較すると 0.1% 以下の危険率で有意であった．また「気になる子」は男児が多く，男児の平均点は女児より優位に高かった．原始反射チェックリスト得点は各行動指標得点と良く相関し，ADHDRS は特に MORO 反射，脊髄ガラント反射（SGR）得点率と相関し，回帰係数が有意であった．SDQ における合計困難度（TDS）は恐怖麻痺反射（FPR），MORO 反射，SGR 得点率で回帰係数が有意になった．一方 SDQ における向社会性は FPR 得点率と，また足指の運動能力テスト得点は足反射得点率とそれぞれ負の相関を示した．

【結語】幼児の行動特性の背景に原始反射の残存（上位中枢による抑制の遅れ）やストレス因による原始反射の顕現の可能性が示された．それぞれの子供に対し，どの原始反射が強く影響しているかを見とることで，その原始反射の統合を目指した試みが有効になり，より個別的効果的に子どもの行動特性を変容させることができると考える．

8 精神科救急病棟（スーパー救急）の実際 南浜病院平成 28 年度の報告

熊田　智・川嶋　義章・豊岡　和彦
渋谷　太志・橋野　健一・新澤　秀範
鈴木　保穂・鈴木　好文・後藤　雅博
医療法人恵生会南浜病院

当院では平成 28 年 4 月より精神科救急入院料病棟（以下：救急病棟）を開設した．

新病棟を新築し 60 床全室個室（1 階と 2 階で 1 単位病棟）であり，1 階は急性期対象：保護室 9 床，一般個室 18 床，特室 1 床，PICU（精神科集中治療室）1 床で構成され，2 階は回復期対象：一般個室 31 床，特室 1 床，心理社会療法室（OT，SST，心理教育，回想法等）1 室 となっている．10 対 1 看護（夜勤帯，1 階 2 名，2 階 2 名の計 4 名配置），専従の精神保健福祉士 2 名が配置されている．

救急病棟要件は主に以下の要件がある．①新規入院患者のうち，6 割以上が非自発的入院であること．②患者の延べ入院日数のうち，4 割以上が新規患者の延べ入院日数であること③新規入院患者のうち 6 割以上が入院日から起算して 3 か月以内に在宅に退院していること．④措置・緊急措置・応急入院の件数は 20 件以上もしくは圏域の 25% 以上であること．⑤時間外・休日・深夜の診療件数が 200 件以上，かつ時間外入院が 20 件以上であること．当院では平成 28 年度は全ての要件を満たしているが，今後も要件クリアへの様々な工夫や努力が必要と考える．

救急病棟開設により入院患者は増加している．（全病棟で 125 人，救急病棟で 64 人）診断名では F2 がやや減少，F3 はやや増加し，特徴的な点として F0 が増加しており，認知症患者の入院が増えているのは全室個室も要因と考えられる．70 ～ 90 代が明らかに増加しており，高齢者の入院は上記の認知症患者の入院が増加していることと関連していると思われる．（全病棟で 79 人，救急病棟で 35 人）

北圏域基幹病院としての救急当番日（平成 28 年度：159 日）を担当し，救急病棟開設により，全室個室のメリットは大きく救急の入院患者を受け入れやすくなった．約 2 ヶ月での退院（平成 28 年度の平均在院日数：61.5 日）となっており退院率の維持のためには退院後 3 ヶ月以上の在宅（再発・再入院予防）が今まで以上に必要となっている．そのため，急性期からの心理社会的治療の導入（心理教育，作業療法，生活技能訓練など）や入院時点からの生活支援の視点（訪問看護・デイケアや地域機関・行政との連携）が重要と考えられる．

救急病棟開設により，全室個室のメリットは大きく救急の入院患者を受け入れやすくなった．薬物療法・心理社会的治療・生活支援など多職種による